

安藤は、商店街の入口にあるファーストフード店に急いでいた。今日はお昼ご飯をファーストフードで済ませることにした。店に着いてカウンターに行くとき、

「いらっしやいませ、こんにちは！こちらでお召しあがりですか？」と若い店員がカウンター越しに安藤に微笑んだ。

「いいえ、持ち帰ります」

「お持ち帰りですね。では、ご注文をどうぞ」

安藤はメニューを見ながら注文を始めた。

「エビカツバーガーを一つ、てりやきバーガーを二つ、ポテトのLサイズを一つ、アップルパイを二つ、それに、アイスコーヒーとコココーラ、ウーロン茶をそれぞれ一つずつ、以上でお願いします」

「ドリンクの方は、SサイズからLサイズまでございますが、いかがなさいますか？」

「全部Mサイズでお願いします」

「はい、かしこまりました。それでは、ご注文を繰り返します。エビカツバーガーをお一つ、てりやきバーガーをお二つ、ポテトのLサイズをお一つ、アップルパイをお二つ、それに、アイスコーヒーとコココーラ、ウーロン茶がそれぞれお一つずつ、お飲物のサイズは全部Mサイズですね」店員は、相変わらずにこやかで、爽やかな対応ぶりだ。

「はい、そうです」と、安藤は店員の接客態度に好感を持ちながら答えた。

「アップルパイの方は、でき上がるまでに少々お時間がかかりますけど、よろしいですか？」

「どの位かかりますか？」

「あと、十分程かかりますが・・・」店員は視線をチラッと調理場の方に移し、でき上がりまでの時間を確認した。

「構いません」

「では、お会計の方よろしいでしょうか？お会計が千八百五十一円になります」

「一万円お預かりいたします。お釣りが八千五百十円になります。こちらの番号札をお持ちになって、空いてる席におかけになってしばらくお待ちください。できましたら、番号をお呼びいたしますので・・・」安藤は『一番』の番号札を渡された。

店内を見回すと、禁煙席、喫煙席に分けられた五十席あまりの席はほとんど客で埋め尽くされていた。客の大部分は商店街で買い物途中の子連れの主婦、中学生、高校生だ。安藤はわずかに空いていた席に腰を下ろし、番号が呼ばれるのを待った。

しばらくすると・・・

「一番の番号札をお持ちのお客様！」呼び声に安藤が立ち上がると、ほぼ同時に店員がカウンターを出て安藤がいる方へ歩いてきた。そして、

「たいへんお待ちいたしました」と言って紙袋を二つ差し出した。

安藤は、紙袋を受け取って出口に向かった。後ろから、

「ありがとうございます」の声に送られながら。